
天使のレリは夢を見ない

小田中 慎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

天使のレリは夢を見ない

【Nコード】

N6765D

【作者名】

小田中 慎

【あらすじ】

彼女はレリエルと呼ばれる。25歳。年齢より幼く見える彼女はリバーズ世界でもトップクラスのサイキッカーだった。・・・そんな彼女はいかにして今日に至ったのか？軍に利用されるサイキック兵器として扱われる彼女たちの非情な世界を描く、RE・BIRTH外伝！

前編（前書き）

この作品についての、お断り

この『天使のレリは夢を見ない』は、作者のブログ『RE:BI
RTH〜リバース』で発表された『闇と光と花と棘』を改題、改作
したものです。

この作品では視覚障害者の主人公が登場し、また、他に障害を持
つ人物も登場します。内容に一部不適切と思われる表現が登場す
る場合もあり、障害を持つ事が良いことであるかのような発言があ
りますが、これは本フィクションを創作するにあたり、どうしても
登場人物に、一部不適切な表現を発言させたり、表現させなくては
作品が成立しない 主人公の過酷な人生を表現するため等の理由に
よるものです。

2

天使のレリは夢を見ない

全く純粹に創作表現でありますので、現実の障害を持つ方々を誹
謗・蔑視する意図は全くありません事を、最初にお断わり致します。
また、障害者に対するいわれの無い仕打ちや誹謗を、例え創作上
においても許せない、または不快感を持つ可能性が少しでもある、
とお考えの方は、本作はお読みにならない事をお勧め致します。
なお、本作を含め、作者のブログにおいては『障害者』という表
記をさせて頂いておりますが、この表記法が、一部問題であるとす
る動きがある事を踏まえた上で、作者は『障害者』という表記が、
『障がい者』『障碍者』『身障者』などの表記と比較して、未だ一
般的表記として認知されている、また、『日本障害者協議会』など、
関係団体の表記が旧来のものであるため、使用しております事も、
ご了承下さい。

わたしのことは・・・ほんとは、だれにも分からない。わたしは、最初から欠陥品として生まれた。欠陥が利点となると信じた男の夢が、私を生み出したのだ、という。

普通の欠陥品は不合格の烙印を押され、捨てられる。だれも、見向きもしない。わたし以前に『製造』された『兵器』の中には、わたしのような欠陥品も多く、それらは『製造』直後に廃棄処分となったという。

サイキック『兵器』の開発研究を進めていた機関は、ただ単に『中央研究所』と呼ばれていた。実際は軍の奥深く、とある射爆場の片隅、弾薬庫に偽装された建物の地下部分にその機関は存在していた。

最初は、ある人物のクローンを作りたいがため、研究がはじまった、と聞く。その人物は、とつても大げさに言えば、人類の突然変異、とてつもない能力を秘めた女、だった。

彼女は今、わたしのごく近くにいる存在だけれど、ふだん、普通にお付き合いして見れば、内にあったかいモノを秘めた人で、別に殺人鬼でも異常者でもないことが分かる。しかし、彼女は、私が生まれるきっかけになり、『あちらの世界』との通信連絡の革新や、戦闘行為自体を全く別の次元へと発展させることにつながるなど、簡単に言えば、世界を変えてしまった人。

能力については、私も彼女に拮抗する能力者だと思っけれど、人

物については、その深さといい身体能力といい、とても適う人じゃない。ああ、彼女の話は、この位にして・・・

最近、やっとわたしは、自分の居場所をみつけた。わたしがいい場所、わたしの、わがままを聞いてくれる人たち。私を、ほめてくれる。わたしは、今、とても幸せだ。

§

「ナンバー35J、です。」 「A、A、B、C、C、C、B
「不合格。」 「ナンバー35K、です。」 「B、A、A、C、
C、C、C」 「不合格」 「ナンバー35L、です。」 「DE
AD」 「次。」 「ナンバー35M、です。」 「DEAD」
「次。」 「ナンバー35N、です。」 「B、B、A、C・・・」

結果を読み上げる白衣の男たちは、円卓を囲んで、分厚いファイルを幾冊もお互いの間に壁の様に並べ、報告の声以外、紙を繰る音だけがする。 やがて最後の結果が読み上げられると、一人の男が、

「シリーズ35は全てNG。 開発は失敗と認定する。 以上。」

バラバラと、ファイルを閉じる重い音。 男たちは一斉に立ち上がると台車にファイルを乗せ始める。

「ちょっといいか？」

男が一人、歳の頃は40、台車にファイルを乗せていた一人に声を掛ける。 掛けられた方は30代後半、2人とも白衣を着て研究者然としているが、40の男の方は、左耳から頬に掛けて紫色に変色した火傷の跡が目立ち、その目は温かみの欠片も無い濃灰色だっ

た。

「なんでしよう?」

30代がファイルを積む手を止め、振り返ると、40男は何も言わずに顎を振って、廊下に誘う。

「どうしてこうもポテンシャルが低いんだ?」

前置き無しで40男が言うと、

「もう、クローンで狙うのは限界だと思います。姿形は、合っている。しかし第4から第6要素が低いのは、おっしゃる通りポテンシャルがこれ以上期待出来ないからです。何故低いのかは、今後の研究次第で明らかになるでしょう・・・」

『グリック』でリバーサーを動員してなにやらやっているそうですが、あちらと連携は、考えているのですか?」

「それはありえない。リバーサー研究は、我々のサイ研究とリンクすべきでない、との上の考えだ。今は諦める。」

「残念です。」

「おい、滅多な事を言うもんじゃないぞ!」

「済みません。ところで、シリーズ36でやって見たい事があるのですが・・・」

「八方塞りだからね、何でも歓迎する。後で提案書を出したまえ。」

「ありがとうございます。」

「何を考えている？」

「出所は余りよろしくは無いのですがね、ナチスがやっていた双生児の実験で、興味深いデータがありまして。」

「ほう、メンゲレたちか？」

「そうです。障害と双子のシンクロとの因果関係、とでもいうのか……」

「ふうん、報告書を楽しみにしているよ。」

*

暗闇の中、静まり返った中に水の音。せせらぎの音。野鳥の
声と微かに風の音。深山^{しんさん}幽谷^{ゆうこく}を思わせる音が流れる。部屋の中
央に木の背付椅子が一脚、そこに5、6歳の少女が座っている。

「36G、もう一度行く。用意はいいか。」

暗闇の中、声が響く。マイクを通した声、若い男の声だ。

「用意はいいです、お願いします。」

「では、用意。」

暫く間が空き、深山の音が響く。やがて、

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・スタート。」

特に変化は、ない。少女は椅子に座ったまま身動きしない。目は開けたまま、闇の奥を見つめるかの様。 ほぼ1分後、

「終了、楽にせよ。」

声が響くと、少女はふと溜息を付き、大きく息を吸い込む。額の汗が球の様にいくつも浮び、それが流れて目に入る。 が、目は瞬きもせず、また、目に沁みた様子も見せない。

「36G、もう一度だ、用意はいいか。」

「はい、お願いします。」

「用意。」

30分後、部屋の明りが点く。 この部屋は分厚い扉と防音壁で囲われ、窓の無い、音楽練習室の様な3メートル四方の部屋、天井には3列に蛍光灯が並び、眩しいほどの明るさだった。

中央の椅子に少女は座ったまま、だったが、頭を垂れ、肩で息をしている。 両手はトレーニングスーツのズボンを硬く握り締め、身体が小刻みに震える。

開錠の重い音と共に、ゴロゴロと音を立て、扉が横に開くと、白衣の男たちが4人、素早く部屋に入る。 更にその後ろから、陸軍の濃紺の制服を着た男と白衣の男が並んで入って来た。

「36G。」

声を掛けたのは白衣の男。その声は、先程来、マイクを通して流れた声だ。

「28回中19回。68%だ。まだまだ安定度が足りない。85%は上げないと。いいね？」

少女はゆつくりと青白い顔を上げる。白衣の男は制服の男に、

「36Gは中々です。プラン・オーデインでは一番の成績で。」
すると制服の男は、36Gと呼ばれる少女の方を全く見ないまま、

「よろしい、実験結果が安定次第、この方針で次回LOTを進める。進捗報告は速やかに上げるように。」

白衣の男が敬礼する。制服の男が退室すると、少女は喉を詰まらせるような声を上げると、床に吐瀉としゃした。そんな少女を見ていた白衣の男は、感情の乏しい声で、

「では36G。この後は予定通り身体訓練だ。15分間の休憩を許す。では、15分後、トレーニングルームで。」

そして白衣も去って行く。少女は、その後姿に呟くように答えた。

「はい・・・管理官。」

わたしが、目が見えない、という事に気付いたのは3歳のとき。白衣の男の一人から教えられるまで、わたしは自分が『見えていない』とばかり思っていた。

この2つの眼球が単なる飾りで、わたしは最初から目が見えない事を前提に造られた、と白衣の男は言った。3歳ではそんなに理解は出来なかったが、わたしが見ているものは、わたしの『能力』が生み出す、視覚以外の4感と、第6感によって頭脳にイメージとして再構築された周辺情報なんだそうだ。見ているものがそのものでなく、わたしの脳が作り出した画像だ、^{イメージ}と言われても余り納得は出来なかった。

だけど、どうして、わたしに見えるものの色や形を答えさせるような実験が、2歳の頃にあったのか、と言う疑問の答えがこの時分かった。彼らは、自分たちの兵器の出来映えをみていたんだ。新型戦闘機に装備されたレーダーか何かの探知装置の具合を確かめるかのよう。

「目などお前たちには邪魔なだけだ。」

ある時、養育官の一人がそう言った。

「視覚は一番騙されやすい感覚だ、そんなものがなくとも、お前は情景を捉え真実ありのままの光景を頭に描く事が出来る。敵の目眩ましなど無力だし、眩しさや暗闇による行動の制限がない。」

男はそう言って頭を撫でた。わたしに躊躇無く触れるのは、彼

を含めた養育官と呼ばれる、普段の世話や一般的な社会常識を教育する、言わば親代わりの役目の者たちだけだった。しかし養育官たちは、愛情をもってわたしたちに接している訳ではなかった。よく訳もなく殴られたし、さんざ悪態を付かれた。そんな事が日常だったので、養育官が機嫌の良い時は、無条件に楽しかった。その時だけは社会教育に登場する『家族』を感じる事が出来たからだ。

§

実験と訓練は毎日、繰り返された。様々な種類の実験があり、実験と訓練がモザイクの様にちりばめられ、その合間に教育が施された。睡眠時間は4時間。一日の残り20時間は全て実験、訓練、教育だった。

教育は、彼女が造られた理由からすれば不思議な位、内容の濃い充実したもので、既に2歳から英語と算数が始まり、6歳になる頃には通常中学一年で学ぶ内容で授業が行なわれていた。

元来彼女たちは頭が良い。IQは200に及び、天才の域、中でも36Gの彼女と36Bの男児は250を越え、2人の授業は特別に大学クラスの内容でカリキュラムが組まれた。

では、なぜこのように天才児並みの教育を施しているのか？理由はただ一つ。彼らは人の頭の中、心の領域まで侵入するからだ。

敵の指揮官の作戦を探るばかりでなく、科学者、政治家、ありとあらゆるケースに備えなくてはならない。せつかく頭に侵入しても、その頭で得られた思考が理解出来なければ意味がない。そのため、彼女は『外』へ出る前から既に世界の知識があった。実験

でも、遠隔地への思考伝達や読取り（これがスムーズに行なえる様になれば思考会話が操れる）の際、相手の記憶から外の世界の情景や常識を知る事が出来、それはそのまま彼女の知識として蓄積され、世界の理解に役立つた。

当初、こうした広範囲の教育は、兵器としてのみ存在している彼女たちの自我を目覚めさせる危険な行為だ、として反対された事もあった。しかし、実験により、限定した最小限の知識では思考潜入や思考会話だけでなく、彼女たちの最大の武器、精神攻撃や心身操作にも影響が出る事が実証され、高度な教育は『サイ』を育成するための重要な要素となった。

彼女が10歳を迎える頃には、教育は大学卒業時まで進み、訓練は実際に『外』へ出たの実践段階まで進んでいた。特に攻撃訓練に重点が置かれ、実際の緊迫感の中で任務を達成出来るよう、色々な『ステージ』が用意された。

最も多いケースは、マンハントで、DF（徴兵訓練部隊）からの脱走兵の追跡や逃走犯の追跡と発見、リバーサーの逃亡者の追跡など、訓練の材料はいくらでもあった。

人質立て籠もり事件などは格好の『教材』であり、発生すれば直ちに、軍中央からの要請の形で所轄の警察に協力の申し入れがなされ、膠着状態ともなれば、解決のきっかけを作るために彼女たちが派遣された。

そんなある日、彼女、ナンバー36Gにとって忘れられない転機が訪れた。

その日も訓練とデータ収集を兼ねた任務が発令され、彼女はサポート部隊と共に、埼玉都心郊外の住宅地へ向った。

そこでは、24時間前から麻薬常習者が立てこもり事件を起しており、その現場で速やかな解決を図る、と言うものだった。

ブリーフテイングの後、彼女は一人で問題の二階建ての敷地へ向う。時間は午後の3時、まだ日も高く、到底人質救出が隠密裏に果たせる時間ではない。

ある意味最悪ともいえる時間に、彼女は隣家の庭から低い塀を越えて庭に侵入した。事前に犯人と、人質になっている犯人の12歳になる長女に『アクセス』し、暗示を掛けて、敷地内の不審な動き、特にリビングの窓を割る音を無視するように働き掛ける。成長した能力者なら、直接この段階で犯人に対する精神攻撃を行い、倒すが、彼女はまだ、相手を『見て』、間近に感じなければ、有効な攻撃を行うことが出来なかった。

しかし、真の理由は、高度のプレッシャーの下で、彼女の潜在能力ポテンシがどれだけ上がるのか記録をとりたい、という研究班からの要請によるところが大きかった。

庭から直接窓を破って入ったりリビングでは、割れた食器が散乱し、椅子が壁に叩きつけられたのか粉々の破片と化している。破片を踏まぬ様ゆつくりと抜け、狭い廊下を階段に向う。

すると、階段の横、バスルームの脱衣所に女が倒れていた。風呂から上がったところを刃物でやられたのか、全裸で俯せに倒れ、血溜りは既に乾き始めて粘ついていた。

彼女はそちらを眺める事をしなかった。そのまま階段を二階に上がる。二階の入り口にタンスのバリケード。その先、八畳の和室に犯人と人質が居た。

30代後半のがつちりとした体格の男。頬がこけ、血走った目の下の隈が黒く深い。右手にサバイバルナイフ。左腕に抱えられた女の子。12歳位で、彼女の2、3歳年上だ。

ダンスが2棹^{さお}、折り重なる様に入り口を塞ぐ前、彼女は躊躇無くダンスの細い隙間から潜る様にして中に入る。

「おい！入るんじゃない！」

男が慌てて怒鳴ったが、彼女がまだ幼い童顔の10歳位の少女と見ると、呆気にとられた様に黙って見つめるばかりだった。

やがて彼女が無表情のまま2人に正対すると、男は、

「どこから入った？ マナミの友達か？」

と声をかける。しかし、彼女は何も答えない。抱き抱えられ

た少女は、男に、

「パパ、お友達だから助けてあげて。」

そして彼女に向って

「早く帰って。」

しかし、彼女は無表情に2人を眺めるだけ。男はそのなりに不安を感じたのか、

「おい、なんだお前、」

と言いつけかけた途端、ひつ、と叫んで立ち上がった。男は少女を離すとナイフも落とし、頭を抱えるようにして泣き出した。泣きながら息を切らせ、何かを言おうと、口を何度も開け閉めしたが、声が出ない。やがて頭を抱えたまま、畳の上に引っくり返った。

・ 3

いつもの訓練なら、こういう場合、犯人が卒倒するか、武器を取り落とした所で警官隊が突入する。しかし今日は違った。攻撃を続け、対象を殺せ、と命令されていたのだ。

彼女は、サバイバルナイフを握り絞めたまま、畳の上をのた打ち回る男を、何の表情も伺わず、ただ眺めている様に見えた。

実際はその時、彼女の最大の武器を総動員して、男に不快、悲しみと頭痛を浴びせていて、その集中が、彼女の油断を産んだ。しかし、油断した事によって、彼女がオンリーワンとなるきっかけも訪れたのだ。

最初は集中する彼女の思考に、ほんの一瞬、流星の様に走る、嫌な予感として認識された。彼女はそれを意識する前に邪念として退け、男に対する攻撃を続けた。

すると今度は稲妻の様に、はつきりとしたイメージを彼女に見せ、消える。そのイメージが意外で信じられないものだったので、彼女の集中が緩み、彼女は今の現象を思わず考える。

何？ 今の。

すると男が肩で息をしながら起き上がろうとした。彼女の攻撃が緩んだのだ。彼女は慌てて集中に戻る。男は再び悲痛の叫び

を上げ、両手で頭を抱え、畳へ頭を叩きつける動作を繰り返す。

「あなた、なの？」

部屋の隅に立ったまま、呆然と父親の異常を見ていた少女が、彼女の方を見る。

「パパをこんなにしたの、あなた、なの？」

しかし、後少して、男を沈める事が出来る彼女に、少女の相手は出来なかった。

その瞬間、フラッシュバックが・・・

同じ部屋同じ光景、男と少女。しかし二人とも立ってこちらを見ている。少女が何か言う。しかし何と言ったのかは分からない。そして少女は落ちたナイフを拾って・・・

意識が現在に戻る。男は再び立ち上がるうとしている。少女はいつのまにか部屋の真ん中に立ち、倒れたタンスを背に立つ彼女との間は1メートル位、すると少女は足元を見て、そこに落ちていた父親のナイフを、素早く屈むと拾い上げた。

何か不思議なものでも見るような、そんな仕草をすると、やがてナイフを右手に握り、目が彼女に向けられる。少女は無言のままナイフを振り上げると、そのまま彼女の方に一歩二歩と近づく。その間、彼女の方は魅せられたように立ちすくみ、少女が自分に切りつけようとしているのを、硬直したまま見ていた。

次の瞬間。窓ガラスが割られ、外から黒い物体が投げ入れられ

た。

閃光と派手な爆発音、直後飛び込む武装警察強行突入班。

立ったままの男は、武警の巨人2人に代わる代わる殴られ、やがて気を失ったところに手錠がかけられる。閃光音響手榴弾の爆発直後、座り込んだ人質の少女は、同じく走り寄った別の2名に抱き起こされ、そのまま割れた窓へ、ベランダへと連れ去られる。

彼女はその間目も閉じず、耳も塞がずにしゃがんだまま。やがて中の一人がフェイスガードを跳ね上げ、彼女の方へスタスタと歩いてくると、ぐいっと彼女を引き起し、間も置かずに素早い往復ピントを浴びせた。

「オイ！　しっかりしろ！　ったく、手の掛かるガキだ。」

男は吐き捨てる様に言うと、

「来い。」

腕を掴んで引き摺る様にして、ベランダに掛かったアルミラダーまで連れて行き、

「降りろ、お前の飼い主が呼んでいる。」

そして、降りようと身を乗り出した彼女に耳打ちする。

「ご主人様はカンカンだぞ。　お前、きつと夕飯は抜きだな。」

下では管理官が待っていた。　彼女は普段白衣を見慣れているせ

いか、彼の軍服に防弾チョッキ姿が似合わない感じがする。お互い無表情のまま、ほんの一瞬視線が合うが、管理官は無言で顎をしゃくると、軍の装甲装輪輸送車の方へ彼女を連れて行った。

薄暗い車両に入ると、いきなり管理官は彼女に

「脱げ。」

とだけ言い、腕組みをして待つ。彼女は何の躊躇もなく、トレーニングスーツと下着を脱ぎ、上半身裸になる。

すると、管理官は腕組みを解いて彼女に近付き、機械的な手際の良さで、彼女の肌に止められていた観測機器の配線やパッドを外し、腰にベルト止めされた機器を外す。それを車両の前方、機器ラックの前に座る女に手渡す。ラックにはぎつしりと計器類が並び、モニター画面と最新のコンピューターが、ほの暗い照明に鈍く光っていた。

女は、厚手の文庫本程度の大きさの機器を、特殊なケーブルで目の前の機器に繋ぎ、キーボードに何か打ち込む。するとカセットデッキが早送りするかのような音と共に、コマンド用のモニターとは別のモニターに、オシロスコープに似た黒地に緑の線が踊るグラフ状のものが現れた。

女が更にコマンドを打ち込むと、揺れながら流れていたグラフがスピードを上げ、やがて画面右上表示された4ケタの数字と、画面左上に流れるカウンターと思しき数字が近付くと、女は再び何かを入力、グラフはゆっくりと走り、やがて左右の数字が一致したところで止まった。

女がモニターを指でなぞり、何かを呟くと、管理官はその横から覗き込む。やがて女は、

「ここに特徴的な波形が見えます。また、精神交信の輻輳が見られます。間違いない、と思います。」

「素晴らしい。我が国通算6人目の予言者の誕生だ。」

管理官は珍しくにこりと笑うと、まだ上半身裸のまま^{たたく}彼女を振り返る。

「36G、やったな、これで『名前』が貰えるぞ。ああ、服を着てよろしい。」

彼女はゆっくりとトレーニングスーツの袖に手を通す。全く無表情のまま、次の指示を受けるため、直立不動となった。管理官は、まだ笑顔のまま、

「では、終了報告だ。ただし、二階に上がった後、お前はおかしな現象を感じたはずだ。その部分は出来る限り詳細に報告しろ。」

管理官が頷くと、モニター前の女が録音装置のボタンを押す。それを合図に彼女は話始めた。

5分後、彼女が口を閉じ、女がストップボタンを押すと、管理官が拍手の真似事をして、彼女の肩を叩いた。

「今夜は何でも好きなものを食べていいぞ、夜のカリキュラムは全て中止、自由時間を五時間与える。まだ肉は苦手か？ そうか、カレーは？ ではそうしよう。ビデオでも見るか？ ああアメリカ

力の新作アニメーションがある、それとも中国の歴史ドラマがいいか？ 原語だが、話せたよな？ そうか、では用意させよう。」

管理官が、車内電話から研究所に電話をする間、彼女はこの突然の変化に首を傾げ、浮かれている、と言ってもよい管理官を見つめていた。

その時、彼女が考えていたのは、飯は抜きだ、と言った武警の突入班員は間違っていたな、と言うどうでも良いような事だった。

近未来の予知、と呼ばれる能力 実際は、人間や生物に思考潜入することで、その個体の思考や本能的行動を予見し、その結果がイメージとしてリアルに頭に浮かぶ、そんなことらしいが、その能力を彼女がポテンシャルとして持っていた事が証明されたのだった。

その時、彼女はあの少女の事が気になり、彼女を探してサーチしたが、彼女も、彼女の父も捉えることが出来なかった。

2人ともその頃には現場を離れ、武警の地方拠点へと送り出されていた。彼女は、2人が速やかにクスリを投与され、記憶があいまいになる様に仕向けられた事にも気付くことはなかった。

わたしが予言者の称号を得て、『レリエル』という名前を貰ったころ、わたしと同じシリーズで造られたナンバー36Bの男の子も、思考会話の長距離記録を打ちたて、注目を集め始めていた。

彼は後に海外での実戦参加で、『ラミエル』と言う名前を貰う事になる。

シリーズ36とは要するに製造ロットで、顕著な成績を残し、実戦化されたものだけが名前を貰えた。昔の戦争で愛馬や軍艦、戦車などが命名される、あのノスタルジーのようなものなんだろう。

名前が認知されていないキリスト教の教典に出てくる天使の名前になっているのは、それまで暗躍していたテロ集団の構成員が付けていた名前だそうで、エンジェルと呼ばれたその連中へのあてこすりらしいが、なんとも妙な事を考えたものだ、と思った。

結局、わたし自身がその『エンジェル』そのものになるとは、その頃は思いもよらなかつた。こんな数奇な事は『予言』など出来ない。今ではラミイとの間で笑い話となっている。

さて、わたしたちのシリーズ36は、変則のロットで、前半4分の1、36Aから36Eまでと、後半36Fから36Uまでは同じシリーズでも製造方法が違っていた。

ラミイのロット、36Aシリーズは通常の遺伝子操作と人工授精による製造で、わたしのロット、36Fシリーズは同じ遺伝子操作でも、何故か様々な障害の因子をワザと含ませて障害者のサイ候補を造り出した。

ちなみにわたしたちが作られた頃には、同じシリーズでも、卵子と精子の提供者は様々で、兄弟という訳ではない。だからわたしとラミイは『同期』と呼ば合っていた。

そして、サイは急速に実戦化が進み、わたしがサイであると正式に認定された、5歳くらいに始まったシリーズ44では6名が、その先のシリーズ47では、9名が実戦レベルになると言われていた。

兵器だろうが製品だろうが、後から造られたものの方が性能が良く、ローコストハイリターンなのは世の常だという。だからシリーズ44Uのサリーや47Mのアッジ、46で一人だけ造られたジブなど、後で実戦化されたものの方がポテンシャルは高いらしい。

けれど、わたしの知る限り現在の日本のナンバーワンは、00とナンバリングされた最初の彼女、そして04V、あのミカエル、少し遅れて33Kアウリ、そしてラミエルとわたし、といったところだろう。別にそういうランクがあるわけではなく、それぞれ得意な技や苦手があり、個性があり、能力者同士本気で戦ったのもわずかな例しかないのです、誰が本当に強いのか、など、やりたくはないし、知りたくもないのがわたしの本音だ。

また、今は敵、味方に別れたけれど元は兄弟姉妹の様な関係だし、あのミカエルはそんな事など気にも掛けないだろうが、わたしは今でも、彼らと戦うことに微かな後悔みたいなものを感じる。

そういえば、元はと言えば、能力を示し成果を上げ、味方をも震え上がらせる様な正に超人的な働きによって、能力者を単なる兵器から兵士へと認めさせたのは、ミカエルの功績だろう。一人で一個中隊を全滅させるだの、働きがあるだのと言われ始めたのはミカエルが最初だった。

最初の能力者ナンバー00、当時はルシファーと悪魔の名前で呼ばれ恐れられたルシフェルや、ルシフェルの遺伝子から最初に造られ、長らく最高のサイと言われていたナンバー02、マスターも、自分たちの活躍によってそれなりに能力者の待遇を改善した人だが、プライドが高く上流思考のあの男は、自分だけでなく能力者全体の地位向上を積極的に目指していた。

とは言っても、彼は能力が一流の人間しか相手にしなかったし、地位向上云々も、そうなれば必然的に自分の取り巻きが増えるし、影響力も増すからであって、全体を考えての事ではなかったが。

理由はどうでも、確かに、わたしが生まれた頃から造られた能力者の待遇が次第に良くなったのは確かで、養育官などと言う制度になったのも、わたしたちのシリーズからだ。それまでは、まるつきり看守と変わらない連中が、普段の監督をしていたと言う。

だけど、いくらミカエルが動こうと、ルシエが抜群の活躍をして階級が上がろうと、軍にとっては所詮、武器は武器だった。

わたしがミカエルのように、それを逆手にとって、最高の武器として大切に扱え、と主張する気が起きなかったのは、それを嫌と言うほど思い知らされていたから。それは、ある脱走事件がきっかけだった。

<レリエル、聞こえる？>

<・・・ジエイ、なあに？>

<また、やつらにやられたよ>

<ひどいこと、されたの？>

<今日は、そうでもなかった。 ちよつとぶたれたけど>

<逆らっちゃ、だめだよ？ いい？>

<うん、大人しくしてるよ、ぼくだってまだ、レリエルみたいになれる自信がある>

<そうね。>

<あと、少しなんだ。 今日少し調子が良くて、成功率は76%だった>

<よかったね、もう少しじゃない>

<うん、もう少しでコンスタントに85を叩き出せるよ>

<がんばってね、ほら、もう、黙りなさい？ 気付かれるよ>

<うん、わかった。 またね>

<またね>

その頃には、彼女は個室を与えられていた。狭いことは狭いが、一人で使うことが出来る。しかし、この特権は彼女の様に『結果』を残せたものだけに与えられた褒美だった。

まだナンバーだけで呼ばれるものは、軍の懲罰房に間借りした専用区域で集団生活をしていた。人工授精や遺伝子操作も、通常の間人を生み出す、不妊治療のような目的で行えば成功率も高かった。しかし、軍が極秘に行っていたのは、サイ兵器の製造。際どい操作を繰り返し、特殊な才能のみ優先して助長する歪んだ開発のため、病弱や体力がないもの、すぐに死亡するものが多発し、無事に育つものも、能力が貧弱で様々な障害を持つものが多く、神をも恐れぬ行為に自殺する研究者も複数いたくらいだった。

軍の懲罰房に残されたのは、そういった軍にとっては余計物ばかりで、彼らが密かに処分されなかったのは、軍に微かに残っていた倫理観や、次第に増える能力者の恨みを買うことを恐れての事と言えた。

ジェイ、と呼ばれたのは36J。レリエルの同期で、思考会話を操れるようになってからは毎日の様に会話をしていた。彼女は彼に会った事は無かった。生まれてすぐに彼女は『有望品』として選別され、他の有望品と共に別の施設で育てられ、その後も彼女たちの道が交わることは無かったからだ。

2人は、会話だけで成立する友情の様なものを育てていた。話の内容から、彼女は彼も障害を持つことを知っていた。しかし、その障害が何であるか、彼は決して話す事がなかった。

彼は自分の障害を恨み、密かに軍を恨んでいた。

彼女らが13の歳を迎えた時、その彼が脱走する、という事件が起きた。前日に、頑張って『シューティング』と呼ばれる技術訓練で合格とされる85%を出す、と宣言していたのに・・・

彼女はその事実を、密かに他の同期から知らされたが、前日の彼の様子からそれを察知出来なかった自分を微かに悔いていた。分かっていれば、止めたからだ。

軍からサイ候補が脱走するのはこれが初めてでなく、過去10例以上あるらしい、起こり得る事件で、この時も一斉に搜索が開始された。そして、彼女が密かに恐れた事が起こった。

訓練の後、自室で本を『読んで』いた彼女の下を、監督官、養育官、そして見たことも無い軍の人間が訪れた。

「レリエル、仕事だ。」

養育官がニヤニヤ笑いながら言うと、監督官が、

「お前と同じシリーズのものが脱走した、つい3時間前のことだ。状況は追々知らせる。マンハント訓練にもなる。搜索に参加しろ。」

「了解。」

そう答える以外、彼女には何も出来なかった。ジェイは野外訓練の最中、見張りの監督官たちを幻惑させて逃走したらしい。彼の能力を低く見積もり過ぎた監督官たちのミスとも言え、だからこ

そ、彼はもう、おしまい、だった。 軍は兵器の暴走など許さない。

当然の様に、彼女と、もう一人、マンハントに参加する36Bと一緒にブリーフティングを受け、支援チーム以外2人で追い詰める、見つけ次第『処分』しろ、と言われ、ジェイの消えた横浜沖の埋立地へと向った。

そこは、広大な荒地で、長年廃棄物処分場として沖へ沖へと埋め立てられ、元来の岸に近い場所こそ、開発されて宅地や商用地に変身していたが、沖合い10キロも先へ行くと放置され、部分部分は危険な汚染物なども捨てられ、立ち入り禁止となっていた。

この場所は、軍の射爆場ともなつて、サイが時折訓練する事もあ、全く衆目が及ばない場所。 いくら広大とはいえ、逃げ場も無い。 可能性があるとしたら、東京湾側へ、海へと逃走することだが、それも泳げないジェイには無理だろう。

「楽しんで来い。」

薄笑いを浮かべる軍属たちに見送られ、2人は夕闇が迫る不気味な『ゴミの島』へ入って行った。

・ 5

「さて、どつする？」

36Bが腕を組みながら言う。

「……とりあえず、先に進みましょう。」

彼女は先に立って、廃棄物の山の間に走る巾10mの広い道を行く。道の両側は高さが5メートルを超えるゴミの山。この辺りはゴミが搬入されて10年以上経っているので、臭いなどは気にならないが、浜風に舞うビニールの破片や埃が身体に纏わり付き、顔を打った。

1キロも行くと道は左右に枝分かれし、視界が開ける。ゴミの山は整形された台形のものから、山積みされた不規則な円錐形のものに変わり、所々にシヨベルカーやブルドーザーが置かれている。

36Bがその内の一台、ゴミの斜面に乗り上げる形で止められていたシヨベルカーの車体に乗って辺りを眺める。

季節は短い秋を迎えた9月中旬、時刻は4時半を回り、丁度日没を迎えた時。濃い茜色に染まった西空が、董色の東空に浮ぶ雲までピンクに染め上げ、思わず見とれるほど美しい夕暮れとなっていた。

36Bは暫くそんな空を見上げていたが、やがて目を閉じ、腕を組んでローディングシヨベルの形に組まれたアームに寄り掛かった。彼女の方も、彼とは道を挟んで反対側の斜面に登り、風に向き合いながら暫く佇んだ。

<レリ?>

<ビー>

<居たよ、感じる?>

<うん、分かる>

<どじする?>

<アクセスしてみる>

<近寄る?>

<ここでもいいわ>

<分かった。ぼくは少し先へ廻り込んでみる>

<了解>

36B、この頃は名前が無いので単に『ビー』と呼ばれたラミイは、斜面を滑り下ると、小走りに枝道の方へ消えて行った。彼女は様子を見て『いたが、やがて東の方角、海が見える方向を向くと、

<ジエイ?>

その方向には軍の射爆場があり、3軍統合の兵器実験場も付属していた。

<ジエイ、答えて>

しかし、その問いに答えはなかった。

<分かった。何も言わなくていいよ? 今、行くからね>

彼女は東に昇った十三夜の月を目指して歩いて行った。

§

わたしはゴミの荒野を早足で進んだ。目のせいだと言いつつ、
くなるけど、走ったり泳いだり、素手で戦ったり撃ったり、運動全
般は得意じゃない。この時もビニールの紐に足を取られたり、何
か固いものに爪先をぶつけて痛かったり、転んだり、と無様なアプ
ローチ。1キロ先からでもわたしが近付いていることが分かった
ろう。でもそのときは、そんな事を気にする必要がなかった。
月が輝いて明るかったし、何より射爆場は水銀灯の白い光とナトリ
ウム灯のオレンジの光で、フェンス周辺が昼間の様だった。

射爆場の境界は例によって高いフェンスで囲われていたけれど、
これは見せたくないものを守るためではなく、余計な動物や人間が
入り込んで怪我をさせないためのものだし、セキュリティも最小限
度のものしかなかった。わたしは射爆場の外周道路添いに移動し
て、赤色回転灯が眩しく幾つも交差するゲートの一つへと歩いてい
った。

§

<レリ?>

<ビー>

<ぼくはその先、500メートルのゲートDから入った。ジエイ
は、ぼくの先1キロほどを移動してる>

<了解、待って>

彼女は立ち止まると神経を集中して、草叢くさむらが畝々と続くその先を探る。間もなく朧気な熱を感じ取り、それを更に見据えると、人が身を低くする黒いシルエットが浮かぶ。草叢をゆっくりと歩いている。

<ビー>

<はい>

<確認した>

<さて、どうする？>

彼は、自分の意見を先に言わない。いつでも相手の意見から先に聞き、自分の意見は、よほどの事がない限り言い出さない。ビィは慎重で奥床しい、などと言われる所以だが、この時ばかりは、彼女もいらついた。

<あなたはいつたい、どうしたいの？>

<え？>

彼女の思念に棘を感じた彼は思わず、

こいつどうしたんだ？

とを考えてしまう。彼女が感情を表わにする事など、皆無に等しい。勿論、彼女の方も彼の驚きを感じ取って、

<あなたが決めて。わたしは運動が得意じゃない。ジエイを捕

縛するとしたら、あなたが率先してくれないと>

<・・・うん、確かに周りの人たち、協力してくれそうにないね、ごめん、分かったよ。ぼくはそのまま背後から彼を追う。君は正面からアプローチして。君が先に追い付いたら、少し時間稼ぎをしてくれないか？>

<了解>

外周道路に展開していた軍の保安部隊は、ほとんどが車両の周りに屯するばかり。たむろ 試しに彼女が数人の思念にアクセスすれば、

特殊部隊がどじったんだから。

やつらが勝手に起こした事故で。

自分の尻は自分で、な。

やってられるかよ、今晚やつとデートにこぎつけたのに！

・・・これではとても協力的とは言えない。彼女がゲートに近付くと、赤色回転灯の洪水の中、偵察装甲車のハッチに上半身を出して、車載機関銃に腕を掛けた将校が薄ら笑いを浮かべて彼女を見送り、その下、太い後輪に寄り掛かっていた兵士が睨むように見ていた。

彼女は我関せずといった態度で彼らの前を通り、ゲート自体を警備していた兵士に、首から下げたIDカードを見せる。兵士は必要以上にカードをためつすがめつした後、乱暴に彼女を叩く様にボディチェックをする。胸や尻を撫で回す時、わざと下卑た笑い声

を上げたが、彼女は一切反応せず、感情を全く表さない眼差しが兵士のニキビ面を凝視していた。

やがて兵士が興味を失い、ライフルの銃身で場内を指し示すと、彼女は敬礼して歩き出す。その後ろで兵士は、

「ガキに戦争やらすとはな。」

聞こえよがしに呟くと彼女の方へ痰を吐き出した。彼女はただ奥を指して歩いて行った。

ジェイはまだ草叢を動いている。ビーは、と意識を向けたが、気配を殺した彼はざっと探っただけでは、たとえ無人地帯であっても捉える事が出来なかった。ようやく、密かに移動する彼の気配を感じ取ると、その方向とジェイが進む方向から会合する地点を割り出し、彼女は少し歩く速度を早め、雑草に足を取られながらも確実にジェイの方向へと進んで行く。

夜空には真円に少し足りない月。浜風はいつのまにか静まり、周辺を照らす照明も次第に届かなくなり、彼女の向かう方向は月明かりだけが蒼く陰影を刻んでいた。

やがて、蒼白く浮かび上がる、元来はゴミの山だった雑草に覆われた起伏の先に、対岸の灯火が美しい東京湾が見えた。そこがこの広大な埋め立て地の果てであり、彼女の目的地でもあった。その直後。彼女はマンハントの目標を視認する。

<ジェイ、止まって>

彼は彼女の先、100メートル程の所を海と平行に南へ向っ

た。多分、実験場から脱走した彼は、隣接する射爆場に入り込むと、中を時計回りに隠れながら移動して来たのだろう。

<ジェイ。 なにもしないから、>

<・・・うそだ>

<ううん、うそじゃない>

<うそだよ、ぼくを殺すつもりで来たんでしょ？>

<ちがう>

<違うない>

ジェイが立ち止まった。 ゆっくりと身を起こす。 月光を浴び、海と対岸の夜景を背後にシルエットを見せている。 彼女も外周の明かりを背景に、彼からはシルエットとなって見えているはずだ。 やがてジェイが、苦笑するイメージを送りつつ『話し』出す。

<まあ・・・仕方ないね、裏切り者が処分されるのは>

<だからそう投げやりにならないで。 少し話し合いましょう>

<いいね。 君を一目見てから死にたいと思ってたんだ>

レリエルが近付くのを、ジェイは佇たたずんだまま眺めていた。ススキを掻き分け枯草の折れるパキパキという音を響かせて、足元も覚束ない彼女は、漸くジェイの前10メートルまでやって来る。

< やつと会えた、レリ >

彼女は月光に照らされて、蒼白く姿を晒す彼を見つめていた。その姿は思わず見返すほど異様なものだった。身長は150センチほど。13歳としては少し低い程度だが短足で少し太り気味なので、見た目は実際以上に太って見えた。

異様なのは上半身で、腕が異常に細く長く、その姿は雪だるまに刺した枯れ枝の腕の様、更に頭が極端に小さく色も黒く、顔の造作自体は悪くないのだが、アマゾンの未開人が何かを作る干し首を連想させ、唇がほとんど薄い一本線なので、その印象が高められている。

彼女は無表情のままだったが、幾分動揺していた。現実感が薄れ、何か別の惑星の荒野で対峙するかのような、そんなドラマチックな感覚があった。多分、ジェイがそう思い、彼女が無意識に同調したからだろう。

< どう？ ぼくのこの姿透視出来た？ >

< ううん。 いつも黒い影の様でよく見えなかった >

< じゃあぼくの勝ちだね。 誰かからのアクセスには、ぼく、敏感なんだ。 だから誰かが『見て』いたら、いつだろうと煙幕を張っていた。 分かる？ 煙幕 >

<言っている意味は分かるわ>

するとジェイは満足そうに『笑う』と、

<ねえ、レリ>

<ん？>

<君は予言者だよな？>

<そう呼ばれているけれど、正確には違うわ>

<それは正確には予知出来ない、という意味？>

<わたしの予言は本物の予知ではない、ということ>

<嘘なの？>

<そうじゃない。フラッシュバックで見る光景は未来そのままの光景ではない、という意味よ>

<じゃあ、ぼくの未来を見て、と言っても無理だね>

<そうね、そもそも、フラッシュバック自体わたしにはコントロール出来ないもの。勝手に浮かぶし、これを見たいと念じても無理だから>

<そうか、残念だな、そんなに先のことじゃないのに>

<いつの自分を見たいの？>

しかし、ジエイはそれには答えず、

<ぼくがなぜ、思考会話だけで君と話をしているか、分かる？>

<いいえ>

<へえ、頭の中隅々まで見ても分からないんだ>

<ええ。考えていることは見えても、元より備わっている性質や身体機能は、それを本人が意識してくれないと、結構見え難いものよ>

<そっか、ぼくにはそういう難しい事、教えてくれないんだ、あいつら、必要ない、ってさ>

<そう・・・>

<まあいいや。ぼくはね、しゃべれないの>

<そうだったの>

<耳も飾りだよ、何も聞こえない>

<そうなんだ、でも思念でカバー出来てるじゃない>

<そうでもないよ。ぼくは完全でない、期待外れだ、そう言われ続けた、知ってるよね？>

<うん、でもそれは、>

くうづん、慰めなくてもいいよ。 本当だもの>

彼はゆっくりと彼女に近寄る。そして目の前に立つと、ほぼ同じくらいの身長の人はお互いに見合った。

くしゃべれない。何も聞こえない。けれど、感じる事が出来る。君も目が見えないね？でも『見えて』いる。普通じゃないんだ、ぼくらは。

おととい、2人の男がやって来て、管理官や養育官と同じで白衣を着ていたけれど、ぼくは初めて見るやつらだった。一人はひどい火傷が顔にあるやつで、他の白衣どもがぺこぺこしてるんだ、お偉いさんなのな。

そして暫く養育官や管理官とひそひそ話をした後、出て行ったけど、そいつらはぼくの方を何度かちらちらと見ていたんだ。で、気になったから、ぼくは養育官にアクセスした。あいつら、ぼくが間抜けだと思ってるから、結構いろんなことを考えていて、時々、重大なこと、分かるんだけど、その時、ぼくは知ったんだ。

ぼくは本当なら今日、5時間ほど前に死んでいたはずなんだ。ここで。ぼくが出来損ないだから、殺せ。訓練中の事故で死んだ、そう言う風にする。そう言いに来たんだ、やつらは>

ふと、彼の目線が彼女から外れる。

くぼくはね、別に死んでもいいんだよ。何も無いから。ぼくには、何も約束されないから、この世では。君と違ってね。でも、あいつらの言いなりで死ぬのは嫌だったんだ。死ぬならぼくなりの方にしたい。で、逃げ出したんだけど、いざとなると、かなりのケジメのつけ方ってどうしたらいいのか、分からなかったんだ。で、うろろしてた>

<ジエイ・・・>

なんて言っているのか、彼女は言い淀んだ。慰めようも無い、深い絶望。ふと見ると、彼がじつと彼女を見ている。

<結局、君に頼むしかない。ぼくは弱虫だから、ケジメがつけられない。お願いだから・・・殺して>

応え様の無い願い。殺せる訳が無い、と彼女は言おうとしたが、言えなかった。本当ではない。それを言っただけは詭弁となる。彼女は彼を殺しに来たのだから。

まだ13歳の彼女たち。しかし、IQ200を超え、尋常ではない生き方をして来た彼女たちは、もう立派に大人の思考をし、故に彼も大人のエゴから行動をした。

彼の長い腕がずっと彼女に伸び、首に掛かる。彼女は動かない。

<殺さないつもりだね？>

しかし、彼女は答えられなかった。何か冷え冷えとした塊が彼女の心に生まれ、それが頑なに動くな、と言っている。

<殺してくれないんだ・・・>

彼の両手が彼女の喉笛を掴み、ゆっくりと力が加わる。

<これでも、だめなの？>

しかし、彼女は動けない。

<君も、死んじゃうよ?>

もう、彼の力は腕が震え出す直前まで高まり、彼女は息が止まり、意識が揺らぎ始める。 苦しい。

<いいんだね、殺すよ、レリ>

もう、どうしても良くなっていた。 このまま死んでもいいよな。

・ ・ ・
そして意識が混濁して行くに任せ、足に力が入らなくなり・

突然、彼の腕が解けた。 彼女は反動で座り込んでしまう。 急に圧力が去ったせいかわ、吐き気がして、激しく咳き込む。 見上げるとジェイが頭を抱え、激しく左右に振っている。 出せない声が叫んでいる。 小さな目が剥き出され、口から泡が吹き出る。 ヒュー、と息が漏れ、身体はガクガク震え、やがて卒倒した。 短い足が痙攣し、腕が上下に何度も振れ、地面を掌が激しく叩く。 そして遂に動かなくなった。

彼女の方は、落ち着きを取り戻して起き上がり、彼の前に行き、しゃがんで彼の顔を覗き込んだ。 その小さい目が彼女の目を捉える。

< >

<えっ?>

しかし、既にその目は光を逸していた。

<レリ、大丈夫？>

<・・・ええ、ビー>

<何してるの！死ぬかもしれないじゃないか！>

<ごめん>

<かわいそうだったけど、仕方なかった。レリを殺そうとしてたから。本当に殺そうとしてたんだよ、彼>

<うん、分かってる>

ゆっくりと立ち上がる彼女の脇を擦り抜け、ビーがやって来てしやがみこむと、ジェイの脈を診る。そして彼は、開いたままの目を閉じてやった。

<時間、1905。任務完了。いい？>

<・・・確認したわ>

<・・・泣いてるの？>

涙が出ていた。見えない、ただの飾りのはずの眼から、涙が溢れて、頬を伝った。生まれてこの方、痛みや苦しさに涙が浮んだ事はあったものの、感情に流された事は無かった。

<行きましよう>

彼女は最寄のゲートに向って歩き始める。彼女は歩きながら、生まれて初めて、声を上げて号泣した。

*

それ以来、レリエルはますます感情に乏しい、無表情な人形となった。

人形といえば、彼女はこの頃からぬいぐるみを好んだ。管理官や養育官が、優秀な兵器への細やかなご褒美に、何がいい？と尋ねると、判で捺したように、ぬいぐるみ、と答える。仕舞にはレリへのご褒美はぬいぐるみ、と決まって、何か任務を行なう毎に一つづつ増えていった。

養育官が管理官に洩らしたところによると、彼女はそれらに自分が処理した者たちの名前を付けている、とのことだった。

いつか自分の名前を付けられた、クマかなにかが現れるんじゃないか、と思つて鳥肌が立ったよ。養育官はそういつて笑つたが、その数ヶ月後、正に実現してしまうなど思いもよらなかつた事だろう。

不思議の国のアリスや赤毛のアンなど、少女向けの小説に没頭したのもこの頃の事で、それまで無頓着だった格好も、正にアンやアリスの様な、古き良き時代の少女の洋装を好んで着るようになった。

任務にもその格好で参加する様になった。あのミカエルも制服や特務服を嫌つて、ジーンズにTシャツ姿で仕事をこなしていたので、止むを得ない場合以外、彼らもそれを黙認した。

まさか絵本から抜け出したような少女が、危険極まりない殺し屋

とは誰もが思わないだろう、と、良いカモフラージュになっているとも考えられていたからだ。

一つだけ不思議だったのは、彼女がサングラスを掛ける様になった事で、視覚障害者ではあるものの、実際目が見えない事で苦労した事はない彼女が、サングラスを掛ける訳が管理官たちには分からなかった。理由を尋ねてもただ見返すだけの彼女に、誰もが何も言わなくなるまで、時間は掛からなかった。

万が一その理由を管理官たちが知ったとしたら、彼女は抹殺されていたに違いない。

<目が、恐いよ、レリ>

ジェイの最期の言葉が、彼女の頭の中で幾度も幾度もリフレインして、忘れられないでいる事など、彼らが気付く訳などなかったが、そしてそれは、彼らが彼女たちに殺されるまで、気付かれる事はなかった。

§

わたしはまた、『ここ』へ帰って来た。

一面の松林。風だけが吹き抜けるなにもない場所。初めてこの風景を見たとき、わたしは、ここでわたしが死ぬフラッシュバックを見た。その姿は老いていたから、多分わたしは生き残るのだから。気を付けていれば、だけど、ね。

どちらにしても、ここは故郷になった訳だ。みんなも、随分気に入ったようだ。

今、わたしの前をアイ様が、赤ん坊を抱っこしながら歩いている。わたしは最近まで彼女たちに近付かない様にしていた。邪魔をしないためもあるけれど、そもそもわたしは、いくらこころを許した仲間でも、群れるのが大の苦手だったから。ひとりでじっとしているのが楽だ。

けれど、つい先日、わたしは別のフラッシュバックを見た。そこは雪を抱く高い山の中腹で、何かの寺院のよう。頭を丸めて赤い袈裟を纏った僧侶たちが、音も無く行き来している。わたしは寺院の壁に凭れて、あの2人が、静かに景色を眺めているのを見ていた。 たったそれだけのイメージだったけれど、そのイメージはかつて無いほどしつかりとした、リアルなイメージで、わたしはきつとそうなると確信した。

だから今も2人と距離を置きながら、お供している。 きっと彼らが近い将来、そういう場所へ行くのだ。そこはきつとこの場所の様に素敵な場所のはず。わたしは2人を見守り、誰も2人の邪魔をすることがない様に護り、お供するのだ。

それは今までわたしが受けた使命のなかで、いちばん大切な、いちばんやりがいのある任務になるだろう。

………ほんとうの、わたしのことは、実は誰も分からない。理解など出来るはずがないのだ。けれど、それはもう、どうでもいいことだった。わたしは今、とてもしあわせなのだから。

終

後編（後書き）

この作品は『RE・BIRTH』のスピンオフ作品です。ぜひ、本編の『RE・BIRTH』並びに同じスピンオフ作品『バンザイクリフの生存者』いきのこりもお読み下さい。

天使のレリは夢を見ない

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765d/>

天使のレリは夢を見ない

2009年3月24日11時18分発行